

「罪人を招く神」井上隆晶牧師

ホセア書6章1～6節、マタイによる福音書9章9～13節

### ①【始まりはイエス様】

今日は12使徒の一人であるマタイが選ばれる場面からお話しをしましょう。彼は徴税人でした。当時イスラエルの国はローマ帝国の支配下にあり、一人一人ローマに税金を納めなければなりません。その税金を集めて納めるのが徴税人でした。中には税金をごまかして取り立てる者も大勢いたので、人々から反感を買っていました。またユダヤ人は、外国人は汚れていると思っており、その汚れた人と交わる徴税人も汚れた人と言われ、仲間扱いされませんでした。道で挨拶することも、家に入ることも、触れることも、一緒に食事をするこもしなかったといひます。そんな徴税人のマタイをイエス様は弟子にしたのです。

9節に「イエスはそこをたち、通りがかりに、マタイという人が収税所に座っているのを見かけて、『わたしに従いなさい』といわれた。」とあります。マタイがイエス様を見て、ついて行ったのではありません。イエス様がまずマタイに目にとめて誘われたのです。信仰の始まりは自分ではなく、キリストの側にあります。聖パウロは「あなたがたの中で善い業を始められた方が、キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださると、…確信しています。」(フィリピ1:6)と語っています。キリスト・イエスの日というのは再臨の日です。「善い業」とは信仰のことです。ここでも信仰を始めたのは神であると書かれています。イエス様は十字架にかかる前に、弟子たちにはっきりとこう言われました。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。…わたしがあなたがたを任命したのである。」(ヨハネ15:16) 聖書は一貫して信仰の始まりは神であると言っています。神がこの私を選ばれたのです。私たちは、「今日はやる気がするとかしないとか、出来るか出来ないか」とか、いつも自分中心に考えます。でもその前に神様の思い、神様の意志をまず考えてみましょう。神様はあなたを呼んでおられ、あなたを望まれ、あなたにこの仕事をして欲しいと言われるのです。

### ②【立ち上がって、イエスに従い続けよう】

9節に「彼は立ち上がって、イエスに従った。」とあります。ルカ福音書を読むと「彼は何もかも捨てて立ち上がり、イエスに従った。」(ルカ5章28節)と書かれています。誰も自分のような者を相手にしてくれなかったのに、イエス様は自分を受け入れ、人として扱い、弟子として呼んでくださったという彼の喜びが「何もかも捨てて従う」という行動として現れたのだと思います。別な言い方をすればならすべてを捨てても構わないほど、すばらしい方を見つけた！ということだと思います。マタイは自分を呼ばれたイエス様に憧れ、好きになったのです。

「イエスに従った」とありますが、動詞の形は「歩くという動作を始めた」ことが強調されています。つまりマタイは「イエス様に従い始めた、イエス様の後について歩き始めた」という意味です。「従うこと」を過去の出来事にしてはなりません。昔はよく教会に行った、昔はよく聖書を読んだ、しかし今日、行っていないならば従うことにならないのです。従うというのは続けることです。

●日光東照宮は柱の一本を逆に作ってあります。それは「完成したものは必ず崩壊してゆくから、どこか一つ未完成のままにしておかなければならない」という徳川家康の教えから来ているそうです。自分のことをいつも不完全だと思うようにしたいものです。私は以前、某教会の司祭から「あそこの教会は偽物だ」言われました。この教会が偽物なら、皆さんも偽の信者ということになります。失礼ですよね。そこで私はこう言いました。「そうです。私は偽物です。だから本物になるために今日も教会に来て祈るのです。自分が本物だと思って誇ったらその人の成長は止まり、腐り始めます。何をもって本物と言うのですか。自分は不完全だと思い、キリストに従い続ける者こそ本物ではないでしょうか。」

### ③【罪人と同席する神】

ルカの福音書を見ると、この後マタイはイエス様のために家で盛大な宴会を開き、自分の仲間の徴税人たちを呼びました。(ルカ 5 章 29 節) 自分を相手にしてくださったイエス様を皆に紹介したかったのだと思います。マタイ福音書では「イエスとその家で食事の席についておられたときのことである。徴税人や罪人も大勢やってきて、イエスや弟子たちと同席していた。」とあります。マタイの家は、イエス様を中心にした罪人たちの集まりであって**教会のひな型**となりました。この中にあなたもいるのです。教会という家の中で、私たちはイエス様を中心としてひとつのテーブルにつき食事を共にします。それが聖餐式です。人と神がひとつのテーブルについて、食事をするのです。食べることは生きることです。共に食べるとは、共に生きることを意味します。私たちは神と共に生きるために食卓につきます。この「同席していた」という動詞は継続(未完了)を意味しています。イエス様は、これからも終わることなく罪人と一緒に食事をするということです。神と罪人がこうして一つの家族となりました。イエス様はよく「徴税人や罪人の仲間」といわれました。彼は罪人の仲間になってくださったのです。神の側ではなく、罪人の側にいて下さいます。だから私の罪深い人生の中で、イエス様は私といつも共にいてくださったのです。いつも私のいる所に同席され、いつも私の仲間と呼ばれることを甘んじて下さいます。何と恐れ多く、有り難いことでしょう。だから罪があるまま聖餐に預かれば良いのです。イエス様の無償の愛、赦し、命を貰い続けながら生きること、それが従うということです。

### ④【わたしはあなたが必要です】

それを見て、ファリサイ派の人たちは弟子たちに「なぜ、あなたたちの先生は徴

税人や罪人と一緒に食事をするのか」(11 節) といいました。イエス様と共にいるということは、既に天国にいるということの意味しています。ですからこの問いは「神はこんな人間をどうして天国に入れるのか、神はこんな罪人たちにどうして赦しを与えるのだろうか」というのです。彼らは信仰というものを誤解しているのです。信仰とは、心のきれいな立派な人がするものだと思っているのです。それを聞いてイエス様は次のように言われました。「**医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。**」(17 節) 医者が必要としているのは病人です。神を必要とするのは罪人なのです。信仰とは、心のきれいな人がするものではなく、心が汚いからするのです。きちんと出来るからするのではなく、出来ないからするのだというのです。別な言い方をするならイエス様は一言こういいたかったのだと思います。「**彼らは私を必要としているからだよ**」。そしてファリサイ派の人に問われます。「お前さんは私をどれくらい必要としていますか。空気のように、水のように慕い求めていますか。彼らはあなた以上に、私を必要としているのだよ。それ故、彼らはあなたより先に天国に入るのだ。ただそれだけなのだよ。」

●フィリップ・ヤンシーは友人に誘われてAAの集会に行きました。AAとはアルコール・アノニマス（アルコール依存症患者自助グループ）の略です。友人はヤンシーに「来いよ、そうすれば初代教会がどんなふうだったか分かると思うよ」といいました。そこで彼はその建物を訪れると、そこにはよく知られた政治家や有名な資産家が、失業した貧しい人や注射針の跡を残す子どもたちと共にいました。自己紹介は「やあ、ぼくはトムです。アルコール依存症で麻薬常習者です。」といっています。すると皆が「やあ、トム」と挨拶します。同情をもって耳を傾け、温かく受け入れ、幾度も肩を抱き合い、笑い、泣きます。みんな同じ問題を抱えている仲間です。ヤンシーは友人に訪ねました。「AAにあって教会にないものは何か。」友人は答えました。「僕たちは誰ひとり自分の力だけではやっていけないんだ。だからこそイエス様が来てくださったんじゃないのかい。でも教会の大多数の人たちは、自分たちは敬虔で優れているというふうな自己満足の雰囲気醸し出している気がする。僕には、その人たちが本当に神様やお互いにより頼もうとしているようには感じられないんだ。…アルコール依存症の者がそんな教会に行くと、自分は欠点だらけの落ちこぼれだと思えないんだ。…アルコール依存症だからこそ、僕は神様なしで生きていけないと分かるんだよ。」

皆さんはどれくらいイエス様を必要としていますか。ユダヤ人たちは、イエス様に対して「お前など必要ではない」といつて捨てたのです。それが十字架です。それでもイエス様は十字架の上で、彼らの罪を赦し祈られました。「彼らは、自分に本当に何が必要なのか分かっていないのです。彼らは必要でもないものに手を伸ばしています。だから彼らをお赦し下さい。いつか私が本当に必要だというこ

とが分かるでしょう。だからその時のために私はこの身を献げます」と言っておられるようです。ああ、神の愛の何と大きく、深いことでしょう。私たちも徴税人や罪人たちのようにキリストに走りつき、「あなたが必要なのです。私をお助け下さい」と祈りましょう。その時、キリストは「あなたは今日、私と共に神の国にいる」と言って下さるでしょう。